



ラオス・クリーン農業開発プロジェクト

クリーン農業ニュースレター

第14号 2021年4月発行



このプロジェクトは5年間（2017-2022）の JICA による技術協力プロジェクトで、ビエンチャン市、ルアンパバーン県、サイヤブリ県及びシェンクワン県の4つのパイロット県を対象としています。プロジェクトは、パイロット県における市場ニーズに基づくクリーン農業（有機農業及び GAP）の推進を目的として活動しています。

最近のトピックス

1. 「太陽熱土壌消毒+土ごと発酵」：農業局クリーン農業基準センター（CASC）による農家への On the Job Training (OJT) を実施

2月11日（金）に CASC 内の圃場で実施した「太陽熱土壌消毒+土ごと発酵」（参照：ニュースレター第12号 2021年2月発行）について、3月26日（金）に結果を確認しました。経過観察で土壌内の水分不足が懸念されましたが、無事に嫌気性発酵（土壌還元処理法）が行われたことを確認できたため、次なる段階として CASC 職員による農家への OJT による普及トライアルを4月9日（金）に実施しました。



（写真）疫病や青枯病で被害を受けたミニトマト

（写真）牛フンと米ぬかを畝上に散布・攪拌後、EM+糖蜜の希釈液を散布



今回、「太陽熱土壌消毒+土ごと発酵」に挑戦した農家はビエンチャン市サイフォンヌア村の有機農業グループ長であるサンティパープ・ヴォンパクディー氏です（参照：ニュースレター第10号 2020年10月発行）。これまでサンティパープ氏の圃場では主力商品として海外品種のミニトマトを生産し

てきましたが、疫病や青枯病等の連作障害に悩まされてきました。今回の普及トライアルでは、農家自身による技術の実施・習得並びに動画撮影による栽培技術マニュアルの作成が目的となっています。これらの活動を通じ、CASC 職員の指導能力の強化、及び普及能力の強化に努めていく予定です。



（写真）サンティパープ氏（左）と CASC 職員、他

2. ビエンチャン市における新たな有機農産物販売スペースの拡大

ニュースレター13号の OA 市場調査結果にあるように、現在、ビエンチャン市の有機農産物の需要が日々高まっています。消費者の要望に応えるために、従来以上に有機農産物販売促進の機運が高まっています。関係者の協力のもと、新たに2つの市場で有機農産物販売スペースが設置されています。

1 か所目はシーコータボン郡サムケート村のラオ・サムパン市場で、2020年8月18日より、毎週



（写真）ラオ・サムパン市場で生産物を販売するタサン村グループのインセン氏

日曜日14時から18時に販売を行っています。平均すると20~25名の農家が30のテーブル（雨期）で販売を行っています。農家の多くは、ノンテー村、タサン村、シエンダー村、ソムサワン村から来ています。

2か所目はチャンタブリー郡トンカンカム村にあるトンカンカム市場です。2021年3月28日より、毎週日曜日6時から14時に販売を行っています。市場では農産物を販売するために、タサン村、ノンテー村、コークサイ村、サイフォーンヌア村、及びブンパオ村のグループに対して40テーブルのスペースを割り当てています。



(写真) トンカンカム市場での販売初日の様子

ビエンチャン市農林局並びに有機農業グループは有機農産物を少なくとも1郡あたり1か所で販売する計画を持っています。

3. JICA ラオス事務所のインターン生の受け入れ



(写真) 佐久間チーフ(左)とインターン生(右)

プロジェクトは、3月22日から26日にJICAラオス事務所のインターン生であるラオス国立大学の学生を1週間受け入れました。以下、インターン生の感想です。「私の名前はスーパーサック・

パンマニーです。ラオス国立大学の4年生で農村開発を学んでいます。JICAラオス事務所のインターンとして、1週間プロジェクトに参加する機会を得ました。最初はラオス人・日本人スタッフと一緒に働けるか不安でしたが、皆さん、非常に親切で、私を受け入れてくれました。業務について丁寧に教えてもらい、アレンジも適切にしてもらい、多くの助言・支援を頂きました。結果、多くのことを学ぶことが出来ました。また、有機農産物の生産現場やOA市場を視察する機会も得ました。私を受け入れてくれ

て非常にありがたく思うと同時に、今回学んだすべてのことを私の将来に役立てたいと思っています。」

0A 現場からの声

このコーナーでは、対象県で有機農業推進に尽力しているキーパーソンに焦点を当て、発信しています。今号では1~2か月に1度の頻度でITECC(International Trade Exhibition and Convention Center) OA市場で残留農薬テストを実施しているビエンチャン市農林局のPlant and Animal Laboratoryを取り上げます。



Plant and Animal Laboratoryは、2019年から代表的な殺虫剤である有機リン系およびカーバメート系の残留農薬検査をOA市場だけでなく、ビエンチャン市内の一般市場でも実施しています。Laboratoryに農産物を持ち込めば、1サンプルあたり100,000Kip(約1,200円)で検査を実施しています。農業セクションの3名が検査を実施しています。3名の職員は国立植物防除センターでの研修を通じて検査手法を習得しました。セクション長のカムカイ・プンソムワン氏によれば、「多くの消費者が本当に有機農産物かどうか疑問に思っています。そのため残留農薬検査は非常に関心が持たれています。」一般の市場では雨期に農産物から農薬が検出されることがあるそうですが、OA市場では危険なレベルでの農薬が検出されたことはないとのこと。

プロジェクトは4月3日(土)にITECC OA市場で実施された残留農薬検査の様子を動画撮影しました。市場内で販売されていた野菜・果物10サンプルに対して、検査を実施しました。いずれのサンプルからも農薬は検出されませんでした。

発行元: JICA クリーン農業開発プロジェクト

Clean Agriculture Development Project (CADP)

Email: cadp.lao.info2@gmail.com

Tel: +856-21 417 681



もっとクリーン農産物を食べよう!

